

## 第一大臼歯の近心傾斜をペンデュラム装置により改善した1症例について

○吉岡華子<sup>1,2</sup>、岡 暁子<sup>2</sup>、尾崎正雄<sup>2</sup>

所属1 よしおか歯科こども歯科

所属2 福岡歯科大学成長発達歯学講座  
成育小児歯科学分野

### 【目的】

う蝕や異所萌出による第2乳臼歯の早期喪失は、第1大臼歯の近心傾斜を招き、後継永久歯の萌出余地不足を引き起こす。小児咬合治療では、第一大臼歯の咬合確立は、最も優先されるが、乳臼歯の保存状態によっては、第1大臼歯遠心移動のアンカー獲得に苦慮することもある。今回、多数歯齲蝕による上顎乳臼歯の早期喪失症例について、ペンデュラム装置を用い第1大臼歯の咬合の獲得を行った症例を経験したので報告する。

### 【方法】

症例：7歳6か月 女児。主訴：咬み合わせが反対なのが気になる。歯科的既往歴：幼少時より、歯科受診していたが、非協力のため、齲蝕治療は中断したまま経過していた。平成28年6月に当院に初診来院した。口腔内所見：Hellmanの歯齢ⅢA。乳臼歯部に多数の齲蝕を認め、上顎乳臼歯は、C3からC4であった。咬合所見：上顎中切歯反対咬合。開閉口時に正中の変位なく、構正咬合は可能。乳犬歯関係3級傾向で、上顎第1大臼歯は近心傾斜していた。Arch length discrepancyは小野の回帰方程式で、上顎は-9.52mm

下顎は-1.95mm。下顎のTotal discrepancyは、下顎5.17mmであった。Convexity: 2.12SD, SNA: -0.89SD、SNB: +1.5SDで、頭蓋底に対し、上顎骨は後方位。Ramus pl to FH: +0.52SDで下顎の経度の後方回転

がみられた。上顎切歯はやや唇側傾斜、下顎切歯はやや舌側傾斜であった。Interincisal angleは130度、FMAは40度でややハイアングルであった。

診断：#1. 上下中切歯早期接触を伴う前歯部反対咬合、#2. 多数歯重症齲蝕による上顎第1大臼歯近心傾斜、#3. 上顎骨劣成長による、骨格性下顎前突とした。

### 【治療経過】

上顎第一大臼歯の齲蝕治療を優先させ、リンガルアーチを装着。上顎乳臼歯はすべて抜歯（治療開始後3か月）。第一大臼歯にレジン築造し咬合を挙上し、複式断線にて上顎切歯の被蓋を改善（5か月経過時）。上顎両側の第1小臼歯放出後、ペンデュラム装置にて上顎第1大臼歯の遠心への傾斜移動開始した（9か月経過時）。第1大臼歯咬合Angle1級で確立し、ナンスのホールディングアーチにて保隙（11か月経過時）。

### 【考察】

本症例は、比較的短時間で齲蝕治療と1期咬合治療を終了することができた。これは、治療開始時の患児年齢が7歳7か月で、上顎両側第一大臼歯の歯根の抵抗が少なく、第1大臼歯の遠心移動がスムーズにできたこと、第1小臼歯が萌出したことで、ペンデュラム装置の適応が可能であったことが要因として考えられる。今後は、口腔衛生管理指導に加え、下顎骨の成長に留意しながら、側方歯の咬合を確立していきたいと考えている。

### 【文献】

石谷徳人著 時間軸を見据えた小児期からの咬合誘導